

Title	土の叫び地の囁き：加藤一夫の生涯と思想
Sub Title	Kazuo Katoh : His life and thought
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1985
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.78, No.4 (1985. 10) ,p.416(100)- 434(118)
JaLC DOI	10.14991/001.19851001-0100
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19851001-0100">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19851001-0100</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 土の叫び地の囁き

——加藤一夫の生涯と思想——

小松隆二

## 序 加藤一夫の再評価

### (1) 1つの回想

今、私の前にいかにも古びた菊判の雑誌がうず高く積まれている。すでにその誌名を記憶する人も少なくなっている『原始』と『大地に立つ』である。大正の一時期、いわゆる大正デモクラシーを背景に華々しく展開された民衆芸術運動、あるいは大正・戦前昭和期を通じて推進された社会思想や農本主義的社会運動の指導的地位にあった加藤一夫の個人誌である。加藤自身の命名に従えば、「加藤一夫個人雑誌」ないしは「加藤一夫編輯」の性格をもつ雑誌である。

この2つの雑誌（『大地に立つ』はいったん終刊の後、すぐに継続再刊されるが、その再刊分は新聞型である。しかし加藤自身は「加藤一夫個人雑誌」と称している）は今日では稀覯本に属し、入手はきわめて困難である。これまで全冊揃いの存在はわずかに1つ確認されるだけであった。私の前に今積まれているのがその揃いである。ここに積まれるにいたる経緯については、今は明らかにすることを控えた（1）いが、かつて紅野敏郎が『原始』の紹介・検討を試みるに際して利用したのも、この揃いであったし、また現在研究者が依拠する同志社大学所蔵の『原始』の写真版も、今私の前にある揃いからの写しである。

私がこの揃いをはじめて目にしたのは、25年位前であったと記憶する。同志社大学がハーバード大学の資金援助による研究計画の一環としてそれらを写真に収めるちょっと前のことである。それ以来、加藤一夫の名、そして『原始』や『大地に立つ』といった加藤の著作・刊行物は私の脳裡の片隅に決して大きな存在としてではなかったが生きつづけてきた。あるときは忘れかけるほど小さな存在になる時期もあったが、結局忘れさることはなく、今日にいたる。

注（1） 紅野敏郎『無産階級文芸誌』への移行——加藤一夫『原始』の検討——『学術研究——総合編——』（早稲田大学教育学部）第20号、1971年。なお紅野には『科学と文芸』の詳細な紹介論稿もあるので、参照されたい（『文学』1960年4月）。

最近、加藤の著作を読み直し、加藤とその時代について考える機会を得て、改めて今日までの経過に感慨深いものを覚えざるをえなかった。この間、私が『原始』と『大地に立つ』を手にするにいたる経緯からも、それを広く研究者の利用に供する方向で責任を果たす必要を感じていた。にもかかわらず、気持とは裏腹に、これまで時の経過を無為に見送るばかりであった。ところが、現在取りくんでいる望月桂をはじめとする大正期の思想史研究の展開のためにも<sup>(2)</sup>、加藤への接近が欠かせない作業になってきた。そこで、かねて感じていた責任の一端でも果たせればという気持もこめて、加藤にかんするノートを久しぶりに取り出してみた。

## (2) 起伏の多い加藤の生涯

近年、何故か活字の上で加藤一夫の名にふれる機会が多くなっている。たしかに、加藤の全体像を考察対象にする論者はまだみられないが、小論や他の主題との関連で付随的にふれる程度のもになると、相当頻繁に目にするようになってきている。それだけに、まだその多くは、彼の再評価を意識して積極的に取りあげるといふ姿勢に立つものではない。

それにしても、長い間真正面から取りくまれることの少なかった加藤がこのところしばしば研究者の関心の環の中に入りだしていることだけはたしかである。たとえ、それらが加藤のある側面について限定的に光をあてる程度のものであるとしても、彼を全体像において理解するための基礎が少しずつ蓄積されつつあると受けとめてよいであろう。

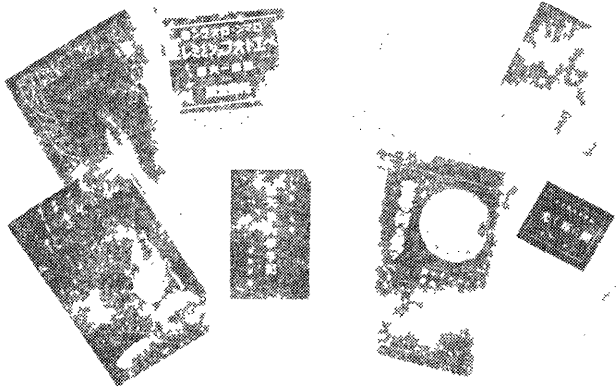
それでは加藤一夫とは一体いかなる人物であるのか。

そう自問してみると、はたと筆が止まり、逡巡と戸惑いに似た気持に支配される。それほど彼は一口でいいあらわすことのむずかしい人物である。人名辞典・文学辞典風に作家、評論家、思想家、あるいはアナキスト、農本主義者といった一般的なレッテルをはる程度であれば、しごく簡単である。しかしそれでは加藤の生涯、そしてその思想・人間像の全体を的確に表現しきれるとはいえない。どれをとっても隔靴搔痒の感を免れえない。彼が単行本として残した著訳書だけでも優に50冊を超えることでもうかがえるように、活動・関係した領域の広さや深さも尋常のものではない。思想的変転の軌跡も、単一の、あるいは一面の評価で処理しうるほど単純・平明ではない。

加藤の足跡をふり返ると、まず日露戦争直前の郷里における中学時代からして、早くも並の中学生からは大きくそれを過ごし方を示す。校長排斥運動を指導し、退学処分にあつた田辺中学校時代にはじまり、受洗したり、反戦運動的動きを示したりする和歌山中学校時代、上京してからは神・信仰中心の生活の時代、そのような生活への懐疑から、自己に基礎をおき、自己の本然のままに生きる本然生活への転進、トルストイとロマン・ロラン、そして文芸への没頭、自立と汎労働主義に立脚する生活の実践、小笠原小雪との恋愛・結婚、民衆芸術運動の先駆、社会主義運動、とくにアナ

注(2) 望月桂については、これまでの研究の一端を「一膳飯屋へちまの主人望月桂」(『図書』1984年7月号)として発表した。

キズム・ニヒリズムへの接近、  
在日朝鮮人との交友、古田大次  
郎らテロリズムに走る青年たち  
の受容、アナキズム・ニヒリズム  
から農本主義への傾斜、さら  
に天皇信仰への傾倒、最後は第  
二次世界大戦後の農本主義への  
回帰と長男哲太郎の劇的な半生  
とのかかわり。こういった多様  
多彩・複雑多岐にわたる足跡に  
みられるように、広範な領域で



加藤一夫の著訳書の一部

活動し、そこにおいて多くの人物、団体、出来事と交流・関係をもつ。

これらの足跡や関係において、時には求道者的に時代の枠ぎりぎりのところで苦闘したかと思うと、時には時代の制約を超えてでもすすむこともあった。死を覚悟する局面に遭遇することも、また死を覚悟して事にあたらざるをえないことも一度ならずあった。加藤は「私は私自身の天職が何処に在るかなぞを考へないで、ただもう馬車馬的に社会の改造や人類の福祉にと、柄にもない事を考え且つ実行しようとした」（『貧者の安住』、不二屋書房、1935年）と自省するが、当時は反権力や反体制に立つ社会運動にあっては、まだ活動家も少ない時で、一人数役でいろいろの領域・問題に顔を出す人物も必要であった。加藤はそれに応えるように、一点集中的な対応よりも、あいついで生起するいろいろの問題に発言し、関与する。それを「気まぐれであり、移り気であり、熱しやすく、冷めやすい性格」とか「あたりかまわず、無責任に飛びあがった」生き方（松永伍一『土着の仮面劇』田畑書店、1970年）と、一面的にうけとめることは、多様多彩な加藤の思想や活動をあまりに一面化・矮小化しすぎることになりかねない。<sup>(3)</sup> 他人に対していかなる評価を下そうと、明快な根拠があり、責任を負う限り、個々人の自由である。たしかにキリスト教の日本化、すべての宗教の天皇信仰への帰一の主張をなす戦時下の対応を、加藤自身も「転向」と公言はしている（たとえば『み前に斎く』龍宿山房、1941年）。しかし私は、わが国の戦時下における転向・転進を転向か非転向かといった二者択一的に分類することには時と場合によって問題があると考えている。加藤の戦時下の対応にしても、10代に信仰にうちこむ時代以来の知友である賀川豊彦や杉山元治郎らの「転向」とともに、時代への迎合は明らかであるとしても、その時代・内容をさらに細密に検討する必要がある。ともあれ、当時の社会運動にあっては一人数役といった役まわりを誰かが演じなければならない

注（3） 松永伍一の加藤論については、塩長五郎の批判がある。「加藤一夫論——アナキズムと農本主義——」『イオム』2号、1973年6月。

### 土の叫び地の囁き

時代であり、加藤はある時は煩悶しつつ、またある時は闇雲にその種の役まわりをひきうける。その際、「あたりかまわず、無責任に」ではなく、彼なりに一貫性をもっていたこと、また彼なりに情熱や愛情、そして精神や知力を惜しみなく注ぎこんだことも否定できない。彼自身の言葉を借りると、「熱情と真剣と捨身とで戦線に立った」(「発刊に際して」『原始』創刊号、1925年1月)ということである。もちろんこの言に対してさえ、松永流に批判することは容易であるが、加藤自身としては、いずれの活動においても信念・真情を吐露する言動であったこと、そして一貫するものをもっていたことは否定できないであろう。ただその場合でも、成功や予期した結果がもたらされる場合ばかりではなかった。試行錯誤のくり返しを避けえなかった。そのため、きわめて起伏の多い軌跡、興味つきない足跡を刻むことになり、その後の彼に対する評価も単一とはなりにくい要因をつくりだすことにもなった。

そのような加藤の思想や行動は、これまでその一部や一面しか明らかにされていない。その生涯さえも、正確・詳細にはあとづけられているとはいえない。ましてや彼を、彼のかかわった文芸・民衆芸術運動、アナキズム・自由人運動、農本主義運動等の中に位置づける作業、あるいは彼を通してそれらの運動全体を解明する作業は、きわめて重要であるにもかかわらず、まだ今後の課題として残されたままである。

加藤にかんして論じられることのもっとも多い側面は、文芸にかかわるそれであろうが、その領域にかんしても、全貌はもちろん、冒頭に紹介した『原始』や『大地に立つ』でさえも、実物自体にめったにお目にかかれぬこともあって、その全体像が解明されるまでにはいたっていない。加藤は、『原始』や『大地に立つ』、そのほか『一隅より』『ことば』(のちに『日本信仰』となる)などの個人誌から、たんなる寄稿誌にいたるまで、数えあげたらきりがなく多くの機関誌紙に関係した。それらのうち、もっとも著名で重要な一つが『原始』であり、また『大地に立つ』である。

そこで、本稿では今後の加藤研究に素材を提供する意味で、まだ詳細には明らかになっていない彼の生涯を、とりわけ研究者の間でも誤りや不明点の多い青少年時代を中心に素描したい。ついで次号で、資料紹介として『原始』の総目次とその内容紹介を試みることにしたい。

#### 1. 郷里、そして田辺時代

加藤一夫は、1887(明治20)年2月28日、和歌山県西牟婁郡防己村69番地4番戸(のち大都河村大字防己69番地、現在はすさみ町防己)で、父加藤義右衛門、母ゆき丞(ゆきともいった)の五男として生まれた。姉1人兄4人を上にもつ末子であった。父は農業に従事していた。加藤家は、かつては山林や畑を相当所有する村の有力者で、加藤の父は防己で庄屋・戸長、長兄虎雄は大都河村の村長をつとめたほどであった。しかし加藤が成長する頃には資産の多くを失いつつあった。

加藤の生れ育った防己(つづら)は、その後大都河村、さらにすさみ町に合併される。今は、世帯も20余、人口30余名、小学校は廃校、寺院には住職もいないといった山村の過疎地である。紀勢本線周参見駅が江住駅から入ることになるが、大阪(天王寺)から約188キロメートル、紀伊田辺から約30キロメートルの周参見駅からの道を選ぶと、ほぼ周参見川に沿う形で古座街道を登る。獅子目峠を越えると、防己に入るが、周参見からはおよそ10キロメートル強の道のりである。道中では滝や谷川のせせらぎにしばしば心を洗われるが、道は細く、しかもくねくね折れ曲っている。乗用車でもすれちがいがむずかしいほど狭いところも多い。つづらの地名自体が蔦のつるのように曲りくねった山道や谷あいからきているといわれる通りの奥地である(『角川日本地名大辞典』角川書店、1979年)。江住から入っても、コカン峠を越えなくてはならないように、古座街道ほどではないが、やはり細く折れ曲った山道を10キロメートル近く登ることになる。

加藤はこの地元で小学校を卒えると、1899(明治32)年、田辺町にある和歌山県立第二中学校に5回生として入学する。加藤が入学した年に、同校は県立第二尋常中学校から県立第二中学校に改称されたばかりであった。田辺といえば、南方熊楠はじめ、社会思想・社会運動家がしばしば登場したり、活動したりする地である。ことに加藤が入学した翌年(1900年)、地方にあってはきわめて進歩的な『牟婁新報』が毛利柴庵の手で発刊されることが忘れられない。のちに荒畑寒村、管野スガ、小田頼造らも記者として関係する新聞である。

まだ電燈もなかった山村の防己に比べれば都会的な田辺での生活は、加藤にとって目を見はらされるものばかりであった。田辺での生活は寮ではじまった。はじめて日曜学校にも通ってみた。同期には、のちにストライキで同志となる田淵豊吉や中豊次郎、あるいは画家となる原勝四郎らがいる。翌年になると、1年下に片山哲らが入学してくる。

加藤が2年に進級した直後、緒方喜三が佐賀から同校校長に赴任する。翌1901年5月、第二中学校は今度は田辺中学校に改称され、今日につづく田辺の名称がはじめて冠されることになる。

緒方は、平素の清潔な人柄とともに、平明な修身と化学の授業のすすめ方で生徒に慕われた。だが彼はわずか1年半の在任で、1901年11月に和歌山中学校に転出する。かわって校長として赴任するのが札幌中学校長の左乙女豊秋である。この交替がほどなく加藤を人生の一大転機ともなる事態に導くようになるとは、当初は全く想像もできないことであった。

左乙女は田辺に比べて、都会的で進取の気風のみなざる札幌が前任地であった上、もともと大阪外国語学校を卒業後、アメリカでキリスト教教育をうけたクリスチャンであった。そのため、田辺の生徒や父兄と肌合いのあわないところがあった。しかも生徒に評判のよかった数学教師の転出が

注(4) 加藤の田辺・和歌山時代については、正確、かつ詳細に記述したものは見当たらない。部分的な記述ではあるが、加藤自身の『私は出家した』(学芸社、1936年)や『み前に齋く』(龍宿山房、1941年)のほか、児玉充次郎『紀州の聖者・ヘール師物語』(ともしび社、1951年)、片山哲『わが師わが友』(創然社、1948年)、同『回顧と展望』(福村出版、1967年)、『高校風土記』(毎日新聞社和歌山支局、1978年)等が参考になるであろう。

## 土の叫び地の囁き

重なり、それが左乙女に対する不満として倍加されることになった。

左乙女校長着任から1年ほどたった1902年にいたると、ついに3年生中心に同盟休校を呼びかける事態が発生する。<sup>(5)</sup>その中心が田淵豊吉、中豊次郎、そして加藤であった。いずれも寮生で、しかも独特の個性をもった生徒たちであった。このストライキに参加した生徒たちは強硬であった。しかし不参加の学生も多く、校長も強硬で譲らず、結局生徒側の敗北に終る。しかも首謀者と目された同期の田淵、中、加藤の3名は退学処分にあう。

その厳しい処分をみて、日本基督教会・田辺教会の宣教師ヘールは若い3名に同情し、斡旋に入った。結局1年遅れることになるが、彼らは田辺中学校か和歌山中学校のいずれかに復学を許されることになった。和歌山中学校にはかつて田辺で加藤らを教えた緒方が校長に就任していた。緒方は、和歌山中学校に着任するや、彼自身に責任はなかったが、ストライキに見舞われており、学生運動的な動きを決して快くは思っていなかった。しかし田辺中学校における左乙女の前任校長であったことから、加藤らのストライキに多少責任を感じていたこと、そして加藤らの前途を慮ることから受入れを認めたものであった。

その結果、中は田辺中学校に1年遅れで復学。加藤は和歌山中学校（現・桐蔭高等学校）に1年遅れで転校する道を選ぶ。田淵のみは、希望すれば田辺か和歌山に復学できたが、その決定前に和歌山に見切りをつけ、上京。東京京北中学校に入学する。

ちなみに、加藤は田辺中学校時代に早くも文章家として知られていた。当時を知る人たちは、加藤が思想方面に走らず、文筆にうちこんでいたら、もっと大きな仕事を成しとげたであろうと回想するのをつねとするほどである。中は数学の天才といわれ、全科を通じて首席で卒業。三高、京都大学工学部へと進み、卒業後は、海軍（技術監）、川崎商船で活躍する。田淵は田辺中学校でも雄弁家として知られていたが、東京京北中学から早稲田大学政治経済学科に進み、のちに和歌山2区より衆議院議員（無所属）となる。議員になるにあたって、田辺中学校同窓会の支持を得たい希望から、1920年、同窓会員に列せられることを願い出て、準会員として認められる。その結果第5回卒業生に仲間入りするので、ストライキ首謀者では、加藤の名のみ、田辺中学校同窓会名簿に記載されないことになり、田辺には加藤の資料・記録がほとんど残らないことにもなる。なお左乙女校長は、問題が落ち着し、平静に復した1903年10月にいたり、田辺中学校を依願退職となっている。

## 2. 転機、そして和歌山中学校へ

先に田辺中学校時代に関係したストライキが、加藤にとって人生の一大転機に直面するほどの大

注（5） 田辺中学校最初の学生ストライキについては、前掲の片山哲『わが師わが友』、『回顧と展望』および毎日新聞社和歌山支局『高校風土記③』にふれられている。

きな意味をもつことを記した。それは以下のような理由による。

その第1は、ストライキ指導が彼にとって最初の反権威・反権力的活動、そして最初の個人を超える社会的ともいえる組織的活動の指導であった点である。第2は、もともとはキリスト教的なものに反発する一面もあったストライキなのに、むしろそれによってキリスト教に本格的にふれる契機を与えられる点である。さらに第3は、思いがけず、和歌山に出て中学生生活を送る機会を与えられる点である。

田辺にはキリスト教伝道などの歴史は古く、自由の気風も早くからみられた。しかし、明治30年代に生徒が校長にはむかうことは、並大抵のことではなかった。にもかかわらず、それをあえて敢行してでも、主張を通そうとした姿勢は、のちの加藤の活動を彷彿とさせるようで興味深いであろう。

また田辺時代、加藤は教会に顔を出したことはあるが、キリスト教を真に理解したり受容したりすることはなかった。ところが、ストライキ指導で処分を受けたことにより、児玉充次郎らのちの和歌山グループも教えをうけるヘール宣教師にはじめて親身の世話になる。そのことが、キリスト教をよそ事や他人事と思っていた彼の姿勢を改めさせるきっかけとなっていくのである。

さらにストライキの結末は加藤に和歌山で残りの中学生生活を送らせることになるが、そこで彼は田辺とはちがうさらに自由な空気、キリスト教を支えにした清新な青年たちの気風にふれる。そして沖野岩三郎ら生涯交友をつづけるよき先輩・よき友人に出会う。

このように、反発・批判をしながらも、結局終生たち切ることのできないキリスト教との最初の本格的な出会いが、田辺中学校から和歌山中学校に転校するのを契機に、つまり元をたどれば田辺中学校における校長排斥のストライキへの関与を契機に訪れるのである。

和歌山に出てから、加藤はキリスト教会に熱心に通う。すでに防己から田辺に出た直後に日曜学校に通った経験をもっていたが、田辺時代にはとくに強くキリスト教にひかれることはなかった。ところが、和歌山では、彼の生き方・考え方の変化もあり、キリスト教にふれる態度が変わった。とくに和歌山中学校は、中途に入りこんだ余所者・新参者として加藤にとって必ずしも気持のなごむところではなかったらしい。それもあって自然に教会に足がむく。彼が通う教会は、当時は三木町にあった日本基督教会和歌山教会(現在は雑賀屋町にある日本基督教団和歌山教会)である。そこで青木仲英牧師、それをついだ滝本幸吉郎牧師の下に集う青年グループ、たとえば沖野岩三郎、児玉充次郎、山野虎市、杉山元治郎、三田村篤四郎、岩橋乙橘らに、加藤はそれまで経験したことのな<sup>(6)</sup>い若さにあふれる熱気のようなものを感じとり、教会活動にひきこまれることになる。加藤をふくむ、その青年グループの一部は、日露戦争直前には和歌山の非戦論グループと目されるほどになる。

この青年グループの中心が日高郡寒川村(現在は美山村)出身の沖野岩三郎であった。彼は1902

注(6) 和歌山教会を中心にした当時の動きについては、『第二世紀への歩みの糧として——日本基督教団和歌山教会100年史——』(和歌山教会、1980年)および児玉充次郎、前掲『紀州の聖者・ヘール師物語』を参照のこと。



### 土の叫び地の囁き

(明治35)年7月6日に青木仲英牧師の下で夫婦で受洗。まもなく小学校教師を辞して伝道見習いとなり、教会活動にうちこむ。さらに沖野は伝道者を志して神学校へ進むべく上京。1904(明治37)年9月、明治学院神学部別科に入学する。沖野が友人・後輩たちにも神学校で本格的に勉強することをすすめたことも一因となって、何人かが明治学院、東北学院、それに大阪伝道師養成学校に進む。その中で、父も兄も政治家で、本人は地元で記者をしていた児玉(那賀郡粉河町出身)、弁護士をめざしていた山野(和歌山市出身)の2人は沖野と一緒に、1904年9月、明治学院神学部別科に入学。和歌山県農会に勤務していた杉山元治郎(大阪府出身)はいったん上京、ほどなく東北学院神学部に進む。加藤がキリスト教に深く傾倒するようになるのは、そのような沖野らの言動に刺激を受けた結果であった。

加藤は沖野らが上京する直前の1904年3月6日、アメリカ人のヘレフォード宣教師より受洗。この年は和歌山教会の活動がとくに盛り上った年であった。それだけに、沖野らに上京されてみると、加藤は大きな空洞感を覚えた。そのため、沖野らを追って神学校へ進むことも考えるが、心の片隅にキリスト教に没入できない何ものかがあり、どうしても伝道者になる決心はつかなかった。

1905年3月、加藤は和歌山中学校を卒業。この段階では、将来政治家になる野心の方が強く、そのためアメリカに渡ることを決意。しかし結局は健康上の理由で留学を断念。悩みつつも、沖野らのあとを追って明治学院神学部予科に入学する。丁度、日露戦争の終わった時であった。

### 3. 神学校時代

加藤が明治学院神学部予科に入学するのは、1908年9月のことである。同期のものより5か月遅れの入学であった。同期には徳島中学校から進学してきた賀川豊彦や後のダンテ学者中山昌樹らが出た。前後の学年を見わたすと、1年上の別科2年に和歌山組の沖野、児玉、山野らが出た。下を見ると、彼が予科2年に進むと、1年に明治学院普通学部から移行者(内部進学者)として八太舟三が入学する。八太はやがて牧師からアナキズム運動に転ずる熱情家で、かつ変わり種でもある。

加藤は、神学校に進学後も、和歌山時代から心にひろがりをはじめていた信仰への懐疑の念を晴らすことはできなかつた<sup>(7)</sup>。そのため、本科に進んでから1年近く休学、そして留年するほどであった。卒業時にいたっても、同期ではただ1人赴任先がきまっていなかつたのも<sup>(8)</sup>、この内なる懐疑と無関係ではない。

大逆事件が信州を発端に惹起される直後の1910年6月11日、本科6名、別科3名のうちの1人と

注(7) この点については、加藤自身の『無明』(春秋社、1920年)や「教育ということ」(『明治学院時報』1939年5月20日号)を参照のこと。

(8) 『福音時報』781号、1910年6月。『明治学院百年史資料集』第4集、1976年。

して卒業式を迎えた。ただし加藤は心の動揺もあり、卒業式には出席しなかった。多くは大連、高松、釧路、福岡、白杵、サンフランシスコと遠方ながら、独立の教会の牧師として赴く中で、加藤は他の1人とともに東京にとどまる。しかも彼のみは独立の牧師としてではなく、日本基督教会・芝教会および両国教会で星野光多牧師の助力者の地位に就任する。そこで1年ほど伝道に従事したあと、自ら辞任。1911年、自由な空気に憧れて、ユニテリアンに転じ、内ヶ崎作三郎の指導する芝の統一教会に所属する。そこで『六合雑誌』の編集を手伝ったり、寄稿したり、また日曜夜の講演を手伝ったりもする(前掲『み前に齋く』)。

しかし信仰中心の生活への疑念は晴れず、1913年6月、統一教会も辞任。なおしばらく(1914年7月まで)『六合雑誌』には関係するが、次第に神であれ、自分以外のものに生を中心をおく生活に別れを告げ、自分自身の本質に中心をおく本然生活に踏みだすようになる。執筆・翻訳にうちこむようになるのも、この頃からである。

#### 4. 文学活動への踏み出し

本然生活に本格的に入る前の一時期、教会から離れた加藤は、鎌倉高等女学校(現・鎌倉女学院)の教師に就任する。1914年4月のことである。全学年あわせても在校生100名位の私学で、担当は英語であった。当時は、社会主義運動にとってはまだ冬であったが、政治や文芸の領域では民衆視点に立脚する対応・活動が注目されだす頃である。

この鎌倉時代はわずか4か月で終る。社会主義的教育をしていると判断されたため、辞職せざるをえなくなったものである。にもかかわらず、のちに「僕が今まで住んだところで気持のよかったところが三つある」(『吉祥寺より』『原始』11号、1925年11月)と懐しく回想する第1の地が、この鎌倉である。それほどに湘南の自然や若々しく美しい女学生たちが彼の胸のうちに、「仕合せな幻」(同上「吉祥寺より」および前掲『み前に齋く』)として生きつづける。丁度この頃は、季節も春、政治や文芸にも雪解けの兆がみられる時期。そして加藤にとっても、処女出版の直後で、大杉栄宅訪問を果たし、かつ小笠原小雪に恋愛感情を強めている時。まさに人生の春であった。それだけに、わずか数か月ではあるが、鎌倉時代は加藤の生涯を迎るとき、忘れてはならない時代となっている。

1914年8月、いったん帰郷。紀州でしばらく過ごす。しかし郷里は当時の加藤にとっては決して居心地のよい場所ではなかった。むしろ都会における第一次世界大戦勃発直後の躍動的な空気が遠い紀伊山中にあっても感じとられ、再上京に胸がうずくばかりであった。結局郷里にいても、机に向かうか、ただいつ、いかなる生活をたてるべく東京に戻るか、ということばかり考える日々となった。そしてそう日をおかずに上京し、新しい人生を歩みはじめることになる。

この間、1913年11月、著作活動の手始めに、トルストイの『闇に輝く光』(文明堂)を翻訳、処女

出版した。ついで1914年4月、ロマン・ロランの『ベエトオフエン並にミレエ』（洛陽堂）を翻訳、出版した。白樺派同人との交遊が契機になった出版で、これを機にしばらく『白樺』を出版している洛陽堂との関係が続くことになる。ともあれ、生涯を貫いて彼の拠りどころとなるトルストイとロマン・ロランの作品が彼の最初の著作であったことは、留意しておく必要があるであろう。

1915年9月、同郷の西村伊作の協力・援助で、月刊誌『科学と文芸』を刊行。それによって、念願であった自由に発言できる場を確保し、同時に文壇・論壇関係者と交流する足がかりも得る。同誌には、『白樺』などの文芸関係者のほか、沖野岩三郎、山野虎市、杉山元治郎、藤浪剛一らのように加藤の近いものも寄稿し、加藤に助力する。同誌は一時『近代思潮』と改題されるが、1918年8月まで29冊刊行・維持される。

この間（1915年）、文集『本然生活』も世に送り出す。その書名にもうかがえるように、この頃、本然生活に取りくむ姿勢をいっそう強めていた。

## 5. 恋愛，結婚，そして飛躍

信仰生活から文学・本然生活に傾斜しかけて、ほどなく、彼は長い人生においても重大事の1つに数えうる出来事に直面する。結婚がそれである。彼にとっては唯一度の結婚となり、かつ彼の人生に明らかにプラスに作用する点では特記すべき出来事であった。

1915年、加藤は翻訳の仕事のため佐賀県唐津町を訪れる。その折、たまたま元唐津藩主で子爵の小笠原家の分家からそう遠くない二の門の下宿屋に逗留する。そこで小笠原長世・リスの六女・小雪と知りあう。1915年4月、『ベエトオフエン並にミレエ』が刊行されるや、すぐに同書表紙裏に「いとも愛する小笠原こゆき様」と署名し、寄贈するほど恋愛感情を深めていく。ついに1916年3月、一家で上京してまもない小雪と結婚にこぎつける。媒酌人は藤浪剛一であった。

藤浪は『科学と文芸』にも寄稿・協力するが、専門は医学（放射線科学）で、レントゲン研究の第一人者であった。岡山医専出身であるが、慶應義塾大学医学部教授として長く奉職。のちに名誉教授となる。ちなみに藤浪は加藤に対して終生よき後援者として協力する。のちのことになるが、加藤の長男哲太郎が慶應義塾大学経済学部に入學するに際しては藤浪が保証人となり、かつ学費も提供する。当時は春秋社が事業失敗の後、なお十分回復をみせていない上、「文筆家にとって不遇の時代」（前掲『貧者の安住』）で、経済的にも苦しく藤浪の好意に甘えることになるものである。専門学校にすすむ次男以下も同様の援助をうけるが、そのうち、生活のある部分も藤浪の援助を仰ぐことになる。

これ以後、一時的に夫婦間に溝が発生することもあるが、家庭的には恵まれた生活に入る。加藤も妻を大切にし、子供の教育にも心をくたくよき夫よき父として尽くす。旧松平家、伊達家、藤堂家とも縁続きの小笠原一族の一員として大らかに育った小雪は、かえって相手が警察であれ、動じ

ないところがあった。加藤の主義・信条には一切口出しせぬばかりか、夫がアナキズム・ニヒリズムに傾斜して要視察人になってからも、信頼し協力する。結婚当初も、小雪にとっては大転換であったが、加藤の意見に従い、北豊島郡鶉山で汎労働主義にそう田園生活に入る。長男哲太郎が誕生するのも(1917年2月)、加藤が号外によりロシア革命勃発の第一報に接し、衝撃をうけるのも(1917年11月)、この家においてである。

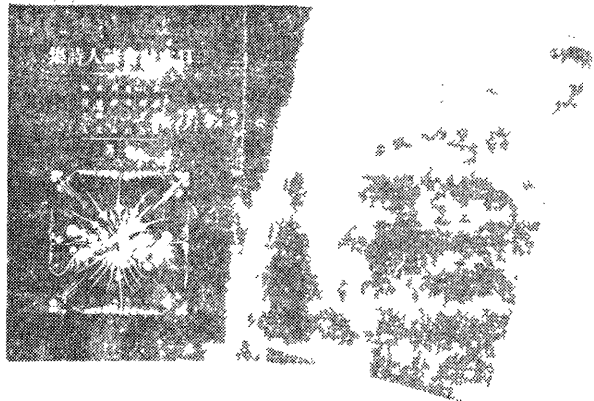
この頃から加藤は執筆活動を本格化し、社会的にも影響力をもつ地位にのぼる。ことに方法的にも独自の視点を形成していくことが注目される。かねて労働者とその生活に心を魅かれるものを感じていたが、この頃には、労働者を主体とする生活と運動を訴え、思考や執筆の拠りどころとするほどになる。このような本然生活・汎労働主義の経験の上に、民衆芸術の視点も構築され、ほどなく大きなうねりになる民衆芸術運動の先導者の1人の地位にのぼるのである。

## 6. 民衆芸術の主張

加藤も主唱者の1人となる民衆芸術運動は、大正デモクラジーの一翼を構成する。それは、足尾鋳毒事件における農民と、都市インテリゲンチア(男女キリスト教徒、自由主義者、社会主義者、弁護士、新聞記者等)および学生による反公害運動を源流とする(一般的には日比谷焼打ち事件、それに初期社会主義が源流とされるが)。大正がすすむにつれて、大正政変、ついで第一次世界大戦の勃発を背景に、時代の空気は明らかに変わり始める。天皇制絶対主義の枠の中で身動きのできない暗く抑圧的な時代から、その厳しい枠が取り払われかけて、あたかも自由に自我の発展を追求できる社会が目前に近づいているかにみえる時代への移行である。ほどなくその状況はロシア革命と米騒動によってさらに加速されることになる。

このような推移の下で、すでに1913年頃には「民衆」政治が口にされて、他に先がけて政治の領域で民衆視点に立脚する主張が訴えられはじめていたが、それに続くように文芸や演劇、さらに美術領域でも、民衆や平民視点に立脚する主張や運動が登場する。

加藤が民衆芸術論を主張して『民衆』『労働文学』等各種の機関誌紙に関係したり、『民衆芸術論』(洛陽堂、1919年)を刊行したり、のちの『民衆



加藤の参加した民衆芸術アンソロジー

## 土の叫び地の囁き

芸術選』(聚楽閣, 1920年)や『日本社会詩人詩集』(日本評論社, 1922年)といった民衆芸術アンソロジーにも顔を出したりするのは、この運動の流れの中においてである。この民衆芸術運動こそ、文学史・思想史の中で彼がもっとも高く評価される活動の一つとってよいであろう。

なおこの民衆芸術の時代に、ひきつづきトルストイへの傾倒もつづく。というより、トルストイは、ロマン・ロランとともに彼の後半生を通して目標であり拠りどころでありつづける。彼自身が翻訳した『何をなすべきか』におけるトルストイの体験を通じた人生観・社会観がいかに加藤自身の人生のあり方に反映されていくかを思うべきであろう。1918年には『トルストイ全集』を企画。これを機に、古館清太郎、神田豊穂らと春秋社の創設にすすむ。春秋社は彼にとって自身の著作集をはじめ、多くの成果を発表する場となるが、同時に経済的拠りどころともなっていくし、また親戚・友人・知人に就職や住居の世話をするときにもよく利用されることになる。

## 7. アナキズム運動の中へ

1919年は、普選運動、労働運動、社会主義運動、学生運動、女性解放運動などあらゆる社会運動が開花ないしは飛躍をとげる年である。労働運動や社会事業において、政治や芸術や教育分野に遅れてではあるが、民衆本位が訴えられるのも、この年以降である。大正デモクラシーの本質は普通選挙制度といった方法や制度によりも、民衆本位・平民本位といった、より人間的な局面に求められるが、それが政治から、芸術、教育、社会的活動・運動にいたるまで、1920年前後に受容されるにいたるのである。

加藤は、民衆芸術の主張に際しては、当初から運動という視点に立っていたわけではなかった。しかし次第に運動の視点に立つにいたる。文芸に傾斜するようになって、自己に忠実に生き、自由に発言しようとするれば、社会主義運動に関与せずとも、必ず当局より注意処分、さらには発禁処分をうけることを、加藤は身をもって知らされる。その結果、彼は、もともと自我や本然を重視する生き方にひかれていたところへ、文芸活動の中でごく自然に反権力の視点・運動の視点に接近する。そして社会主義との接触も深めていく。

具体的に社会(主義)運動組織とかかわりをもつようになるのは、一隅の会を媒介に、1920年の自由人連盟と社会主義同盟の創設への関与からであろう。

自由人連盟の結成は、あいつぐ発禁にあう個人誌『一隅より』を創刊したり、伊藤証信の『精神運動』に協力しだしてまもない同年5月。加藤が中心となる組織で、5月28日、神田明治会館で発会講演会を行なっている。機関誌『自由人』は11月の創刊(当初は菊判雑誌、のちにはリーフレットとして)。連盟員は、活動家が20名位でそう多くはないが、加藤の郷里和歌山県田辺に支部ができるのは面白い。彼は自ら演説会・講演会のピラはりを行なうなど、連盟の活動には力を入れる。小田

原と東京を往復する生活になってからも、両方で連盟の仕事に相当時間をさくほどであったし、地方遊説にもしばしば出かけている。1922年には、「自由人パンフレット」も刊行する。

社会主義同盟の結成は同年12月。その結成にあたっては発起人となるが、さらに創立大会直後に執行委員にも選任される。同盟は当初12月10日を創立大会の予定にしていた。ところが当局の中止・解散命令を予想して、12月9日、元園町の事務所での打ち合せ会を急拠創立大会に切りかえて正式発足にもちこんだ。そのため、神田青年会館における創立大会は報告のみですまされ、当夜の講演会だけが予定通り挙行された。加藤はその講演会の弁士の1人であった。しかし結局は当夜は壇上に上り弁士席についただけで終わってしまう。司会の大庭柯公の開会の挨拶段階で解散命令をくい、弁士は誰も話す機会を与えられずに閉会したからである。なお同年11月に、堺利彦を中心に結成されるコスモ倶楽部にも参加。社会主義陣営では有力者の1人に数えられていたことをうかがうことができる。

これ以後、自由人連盟を軸に、思想的にはアナキズム運動に近い地点に立つ。交友関係も、宗教や文学関係者に加えて、思想・運動関係者にひろがっていく。

ただしこれを機に彼の生への、また執筆や運動への取りくみにおける姿勢・原則が従前と変わるということではない。むしろ彼の場合、一貫していたところに特徴があった。彼が伝道者の道を棄てて、文学に傾斜しはじめたから、一貫して維持される原則は個・自我の重視であり、本然・創造の尊重であった。いうまでもなく、それはアナキズムに通じる原則である。ただ彼の自我・自己本位や本然生活・汎労働主義の考え方には、狭義のアナキズムを超えるものがあつた。実際にリバータリアンなり、より普遍的な自由人としてうけとめる方が、彼の場合あつているであろう。

ともあれ、これ以後アナキストとの交友機会が増えていく。とくに若手のアナキストや在日朝鮮人が自由人連盟や自宅に日常的に出入りするようになる。同時に警察当局の継続的な監視・取締り対象にもなっていく。ある時期は常尾行もつく。ことに東京を離れるときや大きな集会・大会・出来事があるときは必ず特高の訪問やおともがつくようになる。

なお1920年末に、自身の結核療養と家族の健康のため、生活の中心を東京から郊外に移すことを決意し、小田原を転地先を選ぶ。同地には民衆詩派の福田正夫が住んでいたことが直接の理由であった。実際に福田に家探しも依頼するが、翌1921年1月になると、自ら小田原に赴き、不動産屋を介して十字町4丁目の借家を契約する。土地は不便、電燈も不十分、壁も畳もヨレヨレのボロ家であったが、海を見下ろす見晴しのよい高台の地理が気に入って借りることにしたものである。これからしばらく東京と小田原を往来する生活に変わる。この小田原の借家にも多くの青年たちが出入りし、加藤の交友の環はひろがる。その中に川崎長太郎や内野竹千代(威千代)の姿もみられた。というより、この2人は書生風にもっともよく出入りした青年で、小雪と内野が恋愛事件をひき起すのも、この時期である(『乱舞する稲』改造社、1923年)。なお社会運動に少しずつ足を踏み入れた

した1920年2月、次男與志郎が誕生する。

## 8. 関東大震災と東京追放——芦屋時代——

1923年9月1日、関東一円に甚大な被害をもたらす大地震の襲来は、社会主義運動、そして加藤の生活を激変させる。9月5日、日頃よく加藤宅に出入りしていた石黒鋭一郎、平岩巖ら抹殺社グループや自由人連盟グループが巢鴨警察署に検束されていたので、差入れをもって見舞に行った。ところが、戒厳令が終るまでということで加藤自身もその場で検束・留置される羽目におちいる。あげくは態度が悪いと滅茶苦茶な暴行をうける仕末であった。

それでも、当日のうちに小雪の奔走もあり、東京を離れるならば釈放してもよいという方針が警察から加藤に伝えられる。加藤はそれをのみ、翌6日釈放。巢鴨署は収容者にひどい暴行を加えた反面、石黒鋭一郎もそうであったように、状況によっては、早期釈放も認めている。加藤の場合は、小笠原家が警察の上層に手をまわしたからとアナキスト仲間たちが噂するほど早い釈放であった（実際は、結婚以後、小雪は小笠原家への出入りを絶っていたのだが）。翌7日、一家（加藤に、小雪、長男哲太郎、二男與志郎、それに姪の加藤光栄の5人）は尾行つきで、アナキスト仲間の川口慶助に見送られて、日暮里から汽車にのり、東京を離れる。その日は大宮泊。翌8日から直江津、富山、大阪を経由して芦屋に到着。頼りは民衆芸術運動をともしした民衆詩派の富田碎花であった。小田原転地の際の福田正夫といい、加藤は東京を離れるときは、きまって民衆芸術運動時代の友人に世話をうけることになる。もっともこの時は事前に富田に連絡する余裕はなく、道中で電報で西下を知らせるのが精一杯であった。

かくして芦屋に到着。芦屋時代が始まる。富田らの援助で、加藤が小雪と探しまわってみつけた借家は、兵庫県武庫郡精進村芦屋字古新田の2階家であった。

紀州出身の加藤にとって、関西は決してなじみにくい所ではなかった。しかし全く予期しない形での転居だけに、生活が平常に復するには時間の経過が必要であった。この時からほぼ2年間、芦屋生活が続く。

この芦屋時代に、加藤がもっともうちこんだのは、創作活動であった。過去をふり返り、身辺を見わたす余裕をえて、それらを小説風に仕立てて、『闇の舞踏』（吉田書店、1924年）以下、あいついで作品を発表する。それは直接には先輩で生涯を通じて指導をうける沖野岩三郎のすすめによる。もっとも沖野のすすめを受け入れるには、それなりの理由もあった。ひとつには東京を離れたのが追放という形であった事情のため、ことに当初は常尾行がつくなど監視が厳しく、加藤自身にも実

注（9） 山川均は、『労働界』（1925年9月号）のインタビューに答えて、加藤にも言及した後、大震災後の兵庫県警の姿勢を次のように述べている。「私があまり外出しないわけですが——その九分は体が弱いから、……今一つは警察がうる

践にかかわる活動を控える気持があったこと、もうひとつには思いもかけぬ東京脱出と転居で出費がかさみ、原稿料で収入を稼ぐ必要があったことである。

『原始』を刊行するのは、芦屋での生活がほぼ軌道にのる1925(大正14)年1月、つまり加藤一家が芦屋に落ちついてから1年4か月余たってからである。

この仮住居的な生活の中で、雑誌、それも生活原資としてはあてにできない個人誌を刊行するのは、彼の思想上の遍歴からも、きわめて重要な意味をもっている。当時、東京から遠く離れて、とくに彼が深くかかわったアナキズム系が、大杉栄の死もあって震災後の再起で遅れをとっていたため、かつての同志との連絡・交流が十分には旧に復さぬ状態がつづいた。そういった中でかえって、加藤としては自らの思想や行動をふり返る機会を与えられることになった。

彼はまず中央に対する地方を全体や個の問題としてははじめて明快に意識する。彼はいう。「文化が東京に集中するのは今の世の中では是非もないことだが、それにしても地方の思想家や学者や芸術家は余り元気がなさすぎるのではないでせうか。……新しい思想や感情は、今、地方に生れかけようとして居るやうに思われます。ことに農村あたりから出さうな気がします。少くとも私は、大阪や神戸や京都あたりから、いゝものが出てほしいと思ふ」(『芦屋より』『原始』1925年3月号)と。『原始』も少なくとも芦屋時代には、地方にいることを自らの表現や主張の拠点とする意識、つまり中央に対抗する地方住人的意識に少なからず支えられていた。中央と地方の問題は、アナキズムにあっては中心的課題のひとつである。それだけに、加藤の芦屋時代をこの視点からみなおすことも欠かせないであろう。

次に、彼が感じとったことは、自らの思想的未成熟・混沌さである。東京時代には、彼は無我夢中で運動にかかわり、自らの思想がアナキズムないしはニヒリズムで一元化されているつもりでいた。ところが、いったん前線を離れてみると、自らの立脚点も、居場所も一つに定まらぬ不安定なものであることに気づく。彼はいう。第一次世界大戦後、「私は巷に出た。戦場に出た。新しい時代のために、常に第一線に立って戦ってきた。しかし私の運動は凡て失敗であった。……私自身の仕事は、何処にその基礎を据ゑたか。……一年と三ヶ月、その間、どんなに私は、光を求めて苦悶してきたか。而も私は尚、光を得ないのである。」と(『発刊に際して』『原始』1925年1月号)。しかも自らの中にニヒリスト、アナキスト、リアリスト、ロマンチスト等が同居していることも認めている。

そのような自らの不安定・混沌ぶりを、彼はじっと堪え、静思する中で醇化させ、淘汰するのではなく、すすんで動きだすことによって自らの精神的・思想的成熟をはかろうとする。そのようなところにも、『原始』創刊の契機が存していた。

---

さいのね。大体兵庫県警は他より仰々しいやうですね。……僕見たいなものにアムした警戒振りは見当が外れていると思ふんだが。」



## 土の叫び地の囁き

かくして出発する『原始』であるが、『原始』が芦屋という「地方」で刊行されるのは、第8号までの8冊で、そのあとの9号から28号までの20冊は、帰京後、東京で刊行されることになる。それに帰京前後の8号からは、個人雑誌の看板はおろさないものの、全頁加藤一人の筆で埋める方式はやめ、他にも寄稿を求めることになる。もちろん自らの思想傾向や方針にあうものに限定しての依頼であり、採用となる。生活費稼ぎの原稿書きも忙しく、自身の原稿のみでは埋めにくくなったこと、また加藤の周辺からも『原始』に加藤の個人誌を超える役割を期待する声があることが原因である。それとともに、『原始』は個人誌であることが忘れられ、アナ・ボル対立の中、文芸色の濃いアナギズム系機関誌の一つの役割を果たすようになる。とくに19号（2巻7号）からは「加藤一夫編輯」、25号（3巻1号）からは「無産階級文芸雑誌」となり、名実ともに個人誌を超える。

この前後、恋や生活、信仰や思想に悩み苦しんだ青春を主に題材にする創作を多く発表するが、作品的にはもっとも油ののった時期でもある。なおこの芦屋時代に長女不二子（1924年4月）が誕生する。

## 9. 帰京、そしてテロリストをおくる

加藤一家の帰京は、1925（大正14）年8月である。ほぼ2年間の関西生活であった。『原始』第8号の刊行を終えたところでの帰京である。

彼の帰京は、とりわけアナキスト陣営から待ち望まれたものであったが、党派を超えて歓迎された。公開の歓迎会だけでも、2つ開かれたほどである。1つは文壇中心の友人・同志たち、つまり小川未明、秋田雨雀、宮嶋資夫、白鳥正吾、福田正夫、新居格、室伏高信、村松正俊、佐野袈裟美、山崎今朝弥らの発起による帰京歓迎会。銀座北ニホンが会場であった。まだ残暑厳しい9月13日のことであった。もう1つは明治学院学友会による歓迎会で、高等部教授に就任していた神学部同期の中山昌樹宅で開かれた。出席者は牧師や神学部教授たちであった。<sup>(10)</sup>

帰京後はしばらく創作を主活動にする。この頃から徐々に社会運動的なかわりよりも、田園生活・農民生活に向かう姿勢を示すが、本格的に田園・農民生活に傾斜する前に、彼は一連の社会的事件とそれに連座した青年アナキストたちとふれあうことになる。

加藤が芦屋に蟄居するかのよう主に文筆活動に従事している2年間、アナキズム陣営にとっては大事件があいついだ。甘粕正彦憲兵大尉らによる大杉栄らの虐殺にはじまり、そのような震災下の当局の暴虐を隠蔽するための朴烈・金子文子事件、大杉らの虐殺に抗議する和田久太郎らの復讐事件、それと部分的に重なる中浜哲、古田大次郎らのギロチン社事件等である。

注(10)「吉祥寺より」『原始』1925年10月号。永井叔『大空詩人』（同成社、1970年）には前者の北ニホンでの歓迎会の模様が記述されている。

加藤は東京追放のため、これらの事件に直接関係することはなかったが、事件が発覚してからは当然重大な関心を抱いた。加藤が芦屋を切りあげ、帰京した直後の1925年9月10日、和田久太郎、古田大次郎ら東京組に対する判決があった。和田は無期、古田は死刑であった。加藤は、当日公判の傍聴に行くつもりでいたが、時間的に間に合わず、東京刑務所に出かけ、死刑判決をうけたあとの古田に面会をしている。その後刑死までの1か月ほどの間に、加藤は古田に2度面会している。古田は控訴を拒否して刑死を望んだため、死刑執行は10月15日であった。その夜、古田の遺志を尊重する父和三郎の希望で、布施辰治弁護士宅で通夜が行なわれた。加藤も、近藤憲二や望月桂らとともにそれに出席した。

獄中で古田が「参考書」名目で認めた記録は、公判中に布施辰治弁護士の法廷用の一部を使って古河三樹松の手で筆写されていた。それがのちに加藤の手を経て春秋社にわたり、世に送り出される（1926年）。刊行されるやベストセラーになる『死の懺悔』のタイトルは加藤がつけたものであった。

なお、朴烈とともに大逆罪にデッチ上げられる金子文子が獄死した後、獄中手記が『何が私をかうさせたか』と題して刊行される（1927年）。出版社は春秋社であった。これもやはり加藤の紹介で刊行されたものである。

## 10. 農本主義の実践と蹉跌、そして日本主義へ

1927年3月、加藤一家は神奈川県都築郡新治村中山993番地（現・横浜市緑区中山町）に転居する。横浜線中山駅からおよそ10分くらいの地に土地を求め、豪邸ともいえる大きな邸宅を築いた。ゆるやかな傾斜地に、白壁の六角形の塔、しゃれたスレート瓦が目につく西洋館であった。まだ横浜線沿線が開けていない時であり、その家をわざわざ見物にくるものもいるほど目立つ造りであった。

この家にも多くのものが訪れた。トルストイの娘トルスタヤも滞在したし、住井すゑら作家、運動家、無名の青年たちもよく訪ねた。ここへ転居直後に、三男の照夫が誕生する（1927年4月）。

この地で、もともと土いじりの好きな加藤は「三段歩ばかりの畑をつくり、鶏を飼い、豚を飼った」（前掲『み前に齋く』）。庭には好きな西洋ものを中心に草花を植えた。もっともそのようなのかな生活は外見であって、実際には加藤はこの自宅を足場に、理想社会への一步として農本主義的な生活圏づくりの実践を構想していた。<sup>(11)</sup>かつて念願して果たしえなかった農業生活・田園生活への回帰であったが、この時にはかつてとはちがって、たんなる個人的・家族的レベルの取りくみではなく、社会的ひろがりをもつ実験として一大覚悟をもつてのぞんだところに注目すべきものがあった。近くの川井に専従の共働者・塾生もおく川井・共働農本塾も開くが、それが実践の拠点であっ

注（11） 加藤の農本主義については、網沢満昭「加藤一夫の農本思想」（『近代風土』第22号，1985年2月）がある。

た。

この頃も、『解放戦線』などアナキズム系機関誌で論陣をはるが、同時に、1928年、第2次『農民』(農民自治会)、1929年、第3次『農民』(全国農民芸術連盟)に協力したり、1929年10月、春秋社の援助で個人誌『大地に立つ』を創刊したりするように、土・農業への傾斜も目立つようになる。この年、やはり土の生活を追求していた石川三四郎のエリゼ・ルクリュエの会にも参加する。

同じ頃、春秋社で世界大思想全集を企画。普及版を含めると7次にわたる『トルストイ全集』について成功を収める。春秋社の盛業が加藤の農本塾の支えであり、同時にやがてやってくる春秋社の破綻は農本塾の破綻にもつながっていく。二女美地の誕生はこの頃(1930年11月)であった。

その後農村の疲弊、とりわけ満州事変後の農村恐慌の深まりとともに、加藤はいっそう明白に都市への憎悪を強め、都市化・機械化の対極に、確信をもって農本主義を位置づけるようになる。すなわち天地自然と融合する土の生活、具体的には物質主義の否定と自給自足、自主自治と相互扶助の理念に立つ農人的生活の訴えであった。彼はそこに「農民の時代」をみた。

この頃『大地に立つ』に加えて、研究誌として『農村社会研究』を1931年6月、年4回刊で創刊。8月からは、『大地に立つ』の特別号という形で「大地パンフレット」も刊行する(「大地社パンフレット」とは別)。そのほか、同年には農本連盟の『農本社会』の刊行に協力。また農村青年社グループからは成立前から厳しく批判された農本主義者の連盟「日本村治派同盟」にも、すぐに離脱するが、当初は発起人として参加する。さらにこの時代にも、各地に講演によく出かけるが、もはやアナキズムやニヒリズムではなく、農本主義の啓蒙につとめることになる。

ただこれらの運動は、実践的な成果を収める活動に行きつくまでにはいかず、結果的には自由人として生きる原理を探求する姿勢からそれほど抜けることができなかった。とはいえ、全財産を投げうってまでうちこんだ姿勢は十分注目に価するであろう。

なお、この時期に宗教的生活への復帰宣言をなすこと(「宗教の更生へ」『大地に立つ』1931年5月号)、そして農本主義を媒介に日本主義とのつながりの芽がでてくることも、加藤の長い足跡をたどる際、忘れてはならないだろう。

ところが、農本主義の実践の蹉跌は意外に早くやってくる。1934年に、およそ7年間住みなれた中山から川崎市小杉833に転居する。恐慌下での春秋社の失敗が、加藤一家の生活を激変させ、ついに中山の邸宅を手放さざるをえなくしたものである。そのことは、同時に川井の農本塾の破綻をも意味していた。春秋社からの顧問料・援助が一切なくなったため、自宅を担保に借金までして農本塾を維持しようとしたが、それでも支えきれなかったものである。

この直後、大邸宅に「安住」した生活を反省し、自らの気持を整理するように、前掲の『貧者の安住』や『私は出家した』を発表。この頃から次第に日本信仰・天皇信仰に傾斜する姿勢・発言が目立ち始める。東中野に日本教会も創設する。

そこにいたると、天皇を一切の力・一切の根源とする視点を示し、「東西新秩序の確立」も正当化する。そのためにはキリスト教の日本化等も主張する。ただその場合も、時流をあまりに善意に解釈しすぎていたこと、そして西欧こそアジアへの侵略者で、日本には領土的野心がないという認識を前提にしていること、また一方で天皇を最高の権威にすえつつも、他方で農民中心の社会構想も捨ててはいなかったことも忘れてはならないだろう。

## 11. 戦後の再出発

第二次世界大戦後、加藤は新農本主義を掲げて再出発する。しかし健康がすぐれず、時代も工業化・都市化にむけて急速に展開する前夜であり、加藤の思想や行動に目をむけるものは、もはや少数でしかなくなっていた。それでもしばらくは著述の発表の場も何とか確保できた。もちろん戦前ほどではなかったし、次第にそれもむずかしくなっていく。社会的活動で脚光をあびることもほとんどなくなっていく。むしろ『私は貝になりたい』の部分的な原作者である長男哲太郎の戦犯問題などに心を砕く日々となる。

哲太郎は、終戦時にたまたま東京俘虜収容所管轄の新潟第五俘虜収容所(昭和電工鹿瀬工場)所長の地位にあった。収容所責任者はその実績の如何に関係なく戦犯として極刑に処される危険性が強いのを察知した彼は、部下にも地下潜行を指示し、自らも潜行生活に入った。潜行直前に一度両親の下に顔を見せたが、迷惑をかけることを考えて、行先も知らせずにはじめた地下生活であった。

しかし1948年11月、小平市で逮捕され、ただちに横浜の米軍事法廷にかけられた。結果は絞首刑の判決であった。それに対して父の加藤は、長男の無実を信じ、奔走。中学や神学校以来の知友片山哲、賀川豊彦、あるいはアメリカ人牧師らに協力を仰ぎ、再審を嘆願した。哲太郎の出身小学校(明星学園)の恩師・後輩たちや内川千治らキリスト教関係者も再審嘆願に協力。それが実り、マッカーサー元帥が哲太郎の事例について異例の再審を指示。結局再審法廷で、事実誤認があったと判断され、終身刑、さらに禁固30年に減刑された。

かくして哲太郎が巣鴨プリズンに服役しているさ中に、加藤は愛情を注いだその長男にみとられることもなく永眠する。享年64歳。その頃にはすでに、かつて華やかな足跡をしるした加藤一夫の名を知るものも少なくなりかけていた。妻小雪は夫亡きあと、さらに20年近く存命し、1968年7月31日永眠。享年71歳であった。

〔追記〕 このような小稿を書きあげるにも、新しい資料の発掘や関係者からの聴取が不可欠であった。故後閑林平、古河三樹松、内川千治、内海不二子、加藤一二三、目良湛一郎、杉中浩一郎、山倉芳治、松村彰、原田勝弘、勝呂武男等多くの先生・先輩方々の御教示・御世話を頂いた。記して心からの感謝の気持ちにかえさせて頂きたい。なお、ここで使ったタイトル「土の叫び地の囁き」が加藤の著書の一つから取られたものであることは、断るまでもない。  
(経済学部教授)